



クリティカル・ママチャリ宣言

松井茂

赤松正行の造語「クリティカル・サイクリング」をタイトルとしたレクチャーを聞いたのは、2016年4月のことだった。赤松のこれまでの活動を、近年の自転車への関心に接続すると共に、自転車を要に、国内外から様々な観点で収集された情報に基づくレクチャーは、私のような非サイクリストをも興奮させる内容だった。

この後、私は、赤松のレクチャーを宣言文にまとめる役を買って出たりもすることになるのだが、実は相変わらずママチャリにしか乗ってないし、ライドにも参加していない。ここで重要な観点到に気がついてもらいたい。つまり、クリティカル・サイクリングは、サイクリストでなくとも共有できる概念だということである。経験は掛け替えのない自分自身に固有の事象だが、言語化された概念は、経験の如何に関わらず流通し、他者が受容することもできる。サイクリスト赤松のレクチャーには、個人の趣味の吐露に終わらない、新たな概念があった。この点を強調しておきたい。

私にとって、4月からの数ヶ月、赤松をはじめとするメンバーとの協業の時間は、「Tour de idée」とでも呼ぶべきサイクリングであった。要するに、サイクリングを意識した思考の営為こそが、掛け替えのない「クリティカル」な経験だった。私の抽象的なサイクリングをこうして振り返ってみると、私は「クリティカル」を楽しんだわけで、誤解を恐れずに補足すれば、「クリティカル」な経験であれば、「クリティカル・ドライブ」でも「クリティカル・クッキング」でも何でも良かったのかもしれない。いずれにしても、今回は、赤松の準備した概念に、興奮したのだ。

通常「クリティカル」とは、批判的とか分析的ということを指す。無論、それでまちがいのだが、現状の説明に止まらず、私としては、新たな発見やなんらかの展開を含む実践の手法として捉えたいと日頃から考えている。

「パルクール」というスポーツというか、運動というか、パフォーマンスがある。例えばアクション映画で、都市の中の様々な環境を活かして、道路ではなく屋根伝いに走り、階段ではなく梁を梯子に上下動し、玄関ではなく窓を出入口にするような逃走劇を繰り広げるアレだ。なぜこうした逃走劇が面白いのかといえば、従来の道路や建築が持つ意味や、その常識によって促される自分自身の行動のルールが解体され、自らの身体能力で新たに環境を読み替えているからだ。もちろん映画にしろ、実際のパルクールには、超人的な身体能力が前提とされるわけで、特に映画の場合は現実味を感じられないだろう。いずれにしても、条件と推論と実践が導きだす新たな環境のイメージは、様々なメトニミー（換喩）に満ちて

いる。身体能力は、その優劣は措いて、極言すれば反射神経だからシンプルで、新たな道を発見するわけだから、楽しい。私にとってはクリティカルとは、まさにパルクールなのだ。

さて問題は実践で、比喩としてのパルクールは良いのだが、実際にどのように実現できるのか？ これがつまりは研究したり、思考する課題になるわけだ。前述したように、私にとってクリティカルであるとは、モノやコトの従来の意味が、知らず知らず自身に課しているルールを解体することだ。誤解の無いように補足すると、何でもかんでも解体しようというのではなく、自分なりに問い、可能性を探り、自らの世界の肌触りで常識を再構築しようという極々当たり前の営みである。

随分と迂遠な話に思われる向きもあると思うが、そんな私の日常が、「クリティカル・サイクリング」という概念と出会った。パルクールのような超人的な身体運動、抽象的には推論運動を獲得しなくても、自転車が「与えられたとせよ」というところに天恵を見出した次第である。

赤松が提示した「クリティカル・サイクリング」の三原則は、宣言にもあるとおりだ。

自転車に乗ることは、楽しみである。

自転車に乗ることは、シンプルである。

自転車に乗ることは、発見的である。

やや強引だが、私はこれを「テクノロジー（技術工学）」「エスノロジー（民族誌学）」「オントロジー（存在論）」と読み替えてみた。日く、世界に対してクリティカルであるために、自身の身体（推論）能力が超人的でなくても、基礎的な能力を拡張する道具としてテクノロジーがある。自転車に乗ることで、バイカーの身体と世界の関係が、個人レベルで最適化されていくのだとすれば、これはエスノロジーだ。技術の拡張を展開し、関係性を変更するような発見、過激ではない常識の再構築は存在論に関わるはずだ。

例えば、メカニカルドーピングのような行為は、イノベーションとして刺激的だ。身体と技術の倫理観も問い直され、もちろんレースにおけるルールも見直されるだろう。こうした論点から、都市計画や、日常生活の常識を更新する可能性も想像に難くない。

「クリティカル」でありたいという欲求は、身体と世界の境界面（インターフェイス）をどのように見出すかということだ。裸で地面に転がったとしても、皮膚越しに自分が世界を押しているのか、世界に自分が押されているのかは判別できない。人間が世界を考える手がかりは、極薄にしろ、極厚にしろ、なんらかの媒介（メディウム）越しの触覚が必要で、その感覚が境界面に様々なアルゴリズムを見出していくはずだ。自転車もまた、ひとつのメディウムとしてインターフェイスであり、その走りはアルゴリズムの検算なのだ。とはいえ、私は近所の買い物にママチャリで走るばかりなのだ。